

## 生活困窮者支援等のソーシャルワークへの生成 AI 活用の可能性

関屋光泰\*<sup>1</sup>

キーワード：アセスメント、事例検討、現任者研修、介護 DX

### 要 旨

社会福祉における生成 AI の活用は限定的であるが、看護や医療分野では進展が見られる。ソーシャルワーク教育や現任者研修における生成 AI の活用を事例検討やロールプレイで試み、生活困窮者支援領域でのアセスメントシート作成等への可能性を探る。生成 AI は社会福祉等の現場においても、帳票作成の負担軽減と、記録、事務、広報等のサポートにも活用できると考えられる。

### はじめに：社会福祉における生成 AI 活用の可能性と介護 DX

近年、医療や医薬品開発の分野において人工知能（AI）の活用が飛躍的な進展を見せる中、社会福祉領域におけるその導入は、介護ロボットへの応用や一部の相談支援システムなど、依然として限定的な範囲に留まっているのが現状である。児童福祉分野においては、三重県等で児童相談所の虐待対応への AI 活用が試行されるなど、先進的な取り組みも散見されるが、領域全体としては未だ発展途上の段階にあると言わざるを得ない。

一方で、ソーシャルワークの実践現場に目を向けると、増大する職務負担と事例の複雑化、生活問題の複合化への対応は、まさに喫緊の課題となっている。

とりわけ、生活困窮者自立支援事業や生活福祉資金貸付事業等におけるアセスメントシートなどの帳票作成業務は、専門職にとって過重な負担となっており、本来、最も注力すべき面接や訪問といった直接支援業務の時間を圧迫する主要因となっている。

この問題は今に始まったことではない。筆者自身、約20年前に都内のホームレス自立支援施設で実践に従事した際、アセスメントシートの作成に面接以上の時間を割かざるを得ず、クライアントと向き合う時間の確保に苦慮した経験がある。この事務的な職務と対人支援のジレンマは、長年にわたり現場のソーシャルワーカーを疲弊させ続けている構造的な課題である。

こうした現状に対し、社会福祉領域の中で先行する、介護分野（介護 DX）の動向は示唆に富む。介護 DX においては、単なる ICT ツールの導入に留まらず、制度や仕組みの抜本的な改革を伴う構造的な変革としてデジタル化が推進されている。これは「設計→情報基盤整備→試行・実証→全国展開」という段階的なプロセスを経て進行しており、舞鶴市における要介護認定業務へのタブレット・AI 活用による期間短縮等は先駆的な実例である。

介護 DX は、紙ベースや対面中心の業務を電子化することで業務効率化を図ると同時に、ケアプランやサービス提供記録の統合管理をも促進することを企図している。しかしながら、情報基盤の整備は途上にあり、自治体や事業所間での導入スピードの格差、財政的・人的リソースの不足、そして何より情報管理の安全性やプライバシーへの配慮など、解決すべき課題も山積している。これらの先行

---

（所 属）

\* 1 山梨県立大学

事例における機会と課題は、ソーシャルワーク領域における AI 導入を検討する際の重要な参照点となると考えられる。

本稿の目的は、前述した社会福祉専門職の事務作業負担の軽減に焦点を当て、生成 AI の応用可能性を検討することにある。

具体的には、アセスメントシートや帳票の作成、記録の整理、文書の要約や原案作成といった業務において、利用料が無料かつ汎用性の高い生成 AI ツールをどのように活用できるか、現場の視点から提案を行う。

社会福祉実践における AI 導入は、単なる効率化の追求に留まってはならない。AI の設計と運用は、公平性・透明性・説明可能性・安全性・アカウントビリティを含む倫理的枠組みに基づいて行われるべきである。

対人支援領域において不可欠な非言語的コミュニケーションや共感的理解を踏まえ、社会福祉における AI 活用は人間中心のアプローチを基盤とすべきと考える。AI は専門職の判断や能力を補強するツールとして位置づけられ、決して代替してはならない。AI による事務負担軽減で生じた時間は、クライアントとの対話や信頼関係構築という本質的業務に還元されるべきである。

以上の視座に基づき、本論は、生成 AI 活用の可能性を二段階で検討する。

第一に、ソーシャルワーク教育や現任者研修における事例検討シナリオ作成等への応用を試みる。

第二に、生活困窮者支援領域におけるアセスメントシート作成等の実務への応用可能性を探求する。さらに、業務負担軽減という利点に加え、情報漏洩やバイアスなどの倫理的課題を考察し、現場の専門職が倫理的枠組みを遵守しつつ AI を適切に活用するための具体的な提案を提示することを目的とする。

なお倫理的配慮として、演習の受講者に対して、研究目的と意義、成果を公表する際の個人情報の保護、成果の公表方法等について、口頭で説明し、同意を得た。なお、受講者の個人情報は収集していない。そのコメントはカテゴリー化を行った。

ソーシャルワークの事例検討に生成 AI を用いるアイデアは「医療ソーシャルワークにおける生成 AI 活用の可能性」前田 瞬、梅野 潤子、関屋 光泰の共同研究において見出された。また生成 AI が出力した回答の現段階での 3 つの限界も明らかとなり（後述）、これらは第 17 回 IT ヘルスケア学会年次学術大会にて発表された（研究代表者：前田瞬）。

## 1. アセスメント・事例検討における生成 AI の活用

### 1-1. 生活困窮者支援アセスメント

生活困窮者支援におけるアセスメントは、当事者が直面する貧困などの困難と「生きてきた過程」を総合的に理解する活動である。これは、適切な支援計画を策定するために不可欠な、情報収集と分析の一連の過程を指す。

アセスメントでは、当事者の痛みや背景に寄り添いながら、①人間関係、就労、社会資源といった社会的な側面、②健康状態、住環境といった身体的・精神的な側面、③教育歴、地域社会との関係といった文化的な側面を多角的に把握する。

厚生労働省の報告書（平成 27 年度）に基づく標準的なアセスメントシートは、「課題と背景要因」「課題のまとめと支援の方向性」「チェック項目」の三つの柱で構成され、これにより個別の事例に対する包括的な理解と自立に向けた支援計画の策定を図る。

## 1-2. 生成 AI によるアセスメントの試み

本節では、情報セキュリティの堅牢性を主たる理由として採用した生成 AI ツール「NotebookLM」を用い、筆者が作成した架空事例（事例 1）に対するソーシャルワークのアセスメントを試みた。分析の基礎として、事例 1 の詳細記録および前述の厚生労働省の報告書を基に、AI による包括的な事例の分析と考察を生成・提示した。

### 【事例 1】長野氏（35歳・男性）ケース概要（要約）

長野氏（35歳）は秋田県出身で、高校中退後、約 8 年間「何をやっても面倒くさく、バカらしかった」という理由でひきこもりを経験した。家族からの自立を迫られたことを機に上京し、和食料理店などで住み込みの仕事を始めたが、人間関係が煩わしいことなどを理由に短期間で職を転々とした。30歳頃から深酒が始まり、内縁の女性との同棲生活が半年で破綻した。経済的困窮から多重債務を抱え、父親の死後は親族とも関係が悪化し、社会的孤立に至った。昼夜問わず飲酒を続け、家賃不払いでアパートを退去した。アルコール問題で精神科クリニックに通院したが数回で中断し、友人宅での宿泊も限界となり、1ヶ月前から路上生活に至っている。

事例 1 について、「NotebookLM」に「ソーシャルワークの事例検討の事例の文章です。サマリーを作成してください」と入力し、以下の結果が出力された（2025年10月28日出力）。

「35歳の長野氏は高校中退後、約 8 年間自宅にひきこもった。上京後も職を転々とし、30歳頃から深酒で内縁関係と経済が破綻した。親族とも孤立し、アルコール問題でアパートを退去した。友人宅での宿泊も限界となり、路上生活に至った」

次に「NotebookLM」に「このケースの課題と背景要因を以下のポイントから分析して、箇条書きにしてください。

ポイントは、本人の主訴を軸に：相談者が最も困っていること、解決したいことを明確にする。

本人、家族、地域を視野に入れる：個人だけでなく、周囲の環境や関係性も考慮する

ソーシャルワークの専門的な見地から、客観的な視点で分析し、簡潔にまとめる」と入力し、以下の結果が出力された（2025年10月28日）。

#### 「1. 本人の主訴を軸とした課題と解決目標（緊急性含む）

\*現在の最も切迫した課題（主訴）：

- ・路上生活と経済的困窮：友人への宿泊依頼も限界となり、所持金が底をつき路上生活に至っていること。これは経済的困窮が著しく衣食住に困窮している状態であり、緊急支援の実施が必要とされる状況である。
- ・アルコール依存：昼夜問わず酒を飲み続け、家賃不払いでアパートを追い出されるなど、生活破綻の直接原因がアルコール問題にあること。
- ・社会的孤立：借金により親族と音信不通となり、友人にも頼れなくなり、孤立状態にあること。

\*解決したいこと（目標）：

- ・危機介入（安全確保）：路上生活からの脱却と、飲酒状態の改善を含めた健康・生活環境の安定を図ること。

- ・断酒と治療の再開：精神科クリニックでの通院を数回でやめているため、アルコール依存症の治療を再開し、断酒に向けた支援を行うこと。
- ・経済的・住居的基盤の確立：路上生活からの回復後、安定した住居と経済活動（就労）を再建すること。

## 2. 本人、家族、地域（環境）を視野に入れた背景要因の分析

### (1) 本人（個人）の背景要因

\*長野氏の価値観や行動、能力に関する要因。

- ・長期の社会的孤立経験（引きこもり）：高校中退後、約8年間自宅に引きこもり、社会的なつながりや対人関係構築の経験が少ないこと。これは、社会的孤立（ニート・ひきこもりなどを含む）という課題に該当する。
- ・対人関係の回避傾向：短期間で職を転々とした理由を「人間関係が煩わしく、やる気を失うことが多い」と語っており、社会的な関係性を構築・維持する能力に課題がある。
- ・問題の外部化：転職の原因は自分にはないと考えており、自己洞察が困難な傾向があること。
- ・健康問題への対処の中断：アルコール問題で精神科クリニックに通院したが、数回でやめてしまい、問題解決のための継続的な取り組みができなかったこと。

### (2) 家族および人間関係の背景要因

\*長野氏を取り巻く家族、親族、インフォーマルな関係性に関する要因。

- ・家族からの圧力による自立：引きこもりからの脱却は「父親、兄、親族から自立を迫られた」ことがきっかけであり本人の主体的な意思ではなく外部からの圧力に依存していた。
- ・親密な人間関係の破綻：深酒を繰り返すようになった時期に、内縁の女性との同棲生活が半年で破綻していること。
- ・親族との関係断絶：父親の死をきっかけに、借金が原因で親族との関係が悪化し音信不通となっており、家族・親族というインフォーマルサポートネットワークが機能していない。
- ・友人のサポート限界：路上生活に至る直前まで友人宅に宿泊していたが、友人への宿泊依頼も限界となり、社会的な支援ネットワークが完全に途絶えたこと。

### (3) 地域・制度（環境）の背景要因

\*生活環境、経済状況、社会資源の活用に関する要因。

- ・居住の不安定化：アルコール問題により家賃不払いでアパートを追い出され、住居の安定性を失ったこと。
- ・経済的破綻：経済的困窮からカードローンや消費者金融を利用しており、多重債務の状態にあったと推測されること。
- ・就労の不安定性：板前を目指したが、低い賃金や厳しい修行に耐えられず辞めており、不安定な職歴を繰り返している。
- ・制度利用の不継続性：精神科クリニックへの通院や断酒といった、問題解決のための制度的・専門的な支援を継続的に利用できなかったこと

さらに「NotebookLM」に「このケースの課題のまとめと支援の方向性を以下のポイントから分析してください。300字以内で整理してください。ポイントは

課題の優先順位付け:多様な課題の中から、緊急性や重要性が高い課題を特定し、優先順位をつける。

課題の相互関係:複数の課題がどのように関連し合っているのか、因果関係を分析する。

背景要因の特定:課題が生じた背景にある要因を具体的に特定する。

本人と周囲の環境との関係性:本人、家族、地域など、周囲の環境との関係性が課題にどのように影響しているか分析する。

本人の強みと資源:課題解決のために活かせる本人の強みや、利用できる資源を洗い出す。

自立支援機関としての役割:自立相談支援機関が果たすべき役割を明確にする。

関係機関との連携:必要に応じて、他の機関との連携を検討する」と入力し、以下の結果が出力された(2025年10月28日)。

「長野氏の緊急課題は、路上生活からの脱却と所持金の枯渇への対応であり、直ちに住居確保と生活保護申請等の危機介入が最優先となる。

背景要因は、長期のひきこもり経験と対人関係の困難さ、これがアルコール依存と多重債務による孤立・生活破綻を相互的に加速させた点にある。本人と環境との関係性は破綻しており、親族や友人といった周囲の資源が完全に枯渇している。

自立相談支援機関は、まず信頼関係を構築し、本人の職歴や一時的な就労意欲(ストレングス)を活かせるよう、アルコール治療の継続支援を必須とする。支援の方向性としては、医療機関、就労準備支援機関と連携し、包括的な段階的社会復帰計画(プラン)を策定することが求められる」。

### 1-3. AIによるアセスメントの評価

本事例に対する生成AIの回答は、ソーシャルワークのバイオ・サイコ・ソーシャルの視点、および表面化している事柄とその背景を捉える氷山モデルの枠組みに基づく、一定の妥当性を有していると評価できる。AIは、緊急性の高い課題から背景要因の相互関係、利用可能な資源、ストレングス、そして多機関連携の必要性といった、ソーシャルワークに必要な多面的な視点を体系的に提示している。

しかし、これらの回答は総花的な分析に留まり、個別のクライアントに対する深い洞察や、長野氏の人生経験に基づく固有の感情、価値観に寄り添った具体的な対応策を提供する点においては、未だ限界がある。AIは理論的枠組みの適用には優れているが、実践者が培う個別性の理解と介入の機微といった点で課題を残している。

## 2. 生成AIと人間による事例検討

ここでは医療ソーシャルワーク、緩和ケアにおける具体的な支援内容と留意点について、生成AI「Gemini」の提案と、ソーシャルワーク演習の受講学生の回答を比較する事例検討を行った。この比較を通じて、両者の共通点と、それぞれの特徴的な視点を明らかにする。用いた事例は『医療ソーシャルワーク実践50例』から抜粋した。

### 【事例2】

今井さん(48歳、男性)はHIV陽性でAIDSを発症し、病状が進行している。妻のみどりさん(48歳)もHIV陽性であり、夫の看病に専念するため仕事を辞めることを考えている。みどりさんは健康

保険の使用による職場への病名露見を懸念しているが、ソーシャルワーカーは守秘義務と保険使用の重要性を説明し、対応した。また、夫がすぐに死ぬと思い込んでいるみどりさんに対し、ソーシャルワーカーは長期療養の可能性を説明し、経済的な不安を軽減するための支援を実施している。夫の感染ルートが買春であることを知り、怒りと悲しみを感じながらも夫を責められないみどりさんの感情を受け止め、相談等の支援を継続。さらに、将来の不安を抱えるみどりさんに対し、患者会などの情報を提供し、不安軽減を図っている。

この事例に対し、生成 AI「Gemini」に「今井さん・みどりさんへの具体的な支援と留意点を提案してください」と入力し、以下の結果を得た（2024年6月12日出力）。

#### 「\*今井さんへの支援

- ・病状説明と治療計画の共有：今井さんの病状と治療計画について、分かりやすく丁寧に説明する。  
AIDS の病態、進行度、治療法、予後について具体的に伝える。  
治療のメリットとデメリット、副作用について説明する。  
治療スケジュールや入院生活について説明する。
- ・不安や心配への傾聴：今井さんの不安や心配に共感し、じっくりと話を聞く。  
AIDS に対する偏見や差別への不安、将来への不安、経済的な不安、家族への心配、死への恐怖
- ・情報提供：必要に応じて、以下の情報を提供する。  
AIDS に関する情報、医療費に関する情報、制度・サービスに関する情報、相談窓口に関する情報
- ・意思決定支援：今井さんの意思決定を尊重し、支援する。
- ・治療方針の選択、退職や生活設計、家族への告知
- ・感情処理：悲しみ、怒り、不安などの感情を理解し受け止める。
- ・社会復帰支援：退院後の生活について相談に乗る。  
自宅療養や施設入所に関する情報提供、生活支援サービスの紹介
- ・家族との連携：今井さんの希望に基づき、家族との連携を図る。  
家族への病状説明、家族のサポート体制構築
- ・秘密保持：今井さんのプライバシーを厳守する。略

#### \*みどりさんへの支援

- ・病状説明：みどりさんの病状について、分かりやすく丁寧に説明する。  
HIV の感染経路、症状、治療、予後について具体的に伝える。  
治療のメリットとデメリット、副作用について説明する。  
定期的な検査や経過観察について説明する。
- ・不安や心配への傾聴：みどりさんの不安や心配に共感し、じっくりと話を聞く。  
感染に対する不安、将来への不安、経済的な不安、夫への心配
- ・情報提供：必要に応じて、以下の情報を提供する。  
HIV に関する情報、医療費に関する情報、制度・サービスに関する情報、相談窓口に関する情報
- ・意思決定支援：みどりさんの意思決定を尊重し、支援する。  
治療方針の選択、夫婦関係のあり方、仕事の継続・休職

・感情処理: 悲しみ、怒り、不安等の感情を理解し、受け止める。

\* 支援の留意点

- ・夫婦それぞれの状況に合わせた支援を行う: 今井さんとみどりさんはそれぞれ異なる状況にあるため、個々のニーズに合わせた支援を行う必要がある。
- ・夫婦のコミュニケーションを支援する: 夫婦が互いの気持ちや考えを共有できるよう、コミュニケーションを支援する。
- ・長期的な視点で支援を行う: AIDS は長期的な治療が必要となる疾患であるため、長期的な視点で支援を行う必要がある。
- ・専門家との連携: 必要に応じて、医師、看護師、心理士などの専門家と連携して支援を行う。

\* その他

今井さん・みどりさんへの支援は、医療ソーシャルワーカーだけでなく、他の医療スタッフや支援機関と連携して行うことが重要である。

今井さん・みどりさんの希望や意思を尊重し、支援を行うことが重要である。

今井さん・みどりさんのプライバシーを厳守することが重要である」。

次に、事例に対するソーシャルワーク演習の受講学生16名の回答をカテゴリー化したものを比較対象として提示する。

学生の回答は、「具体的な支援」として、定期的な話し合いの機会の確保、精神的なサポート、ケアの分担（訪問看護の利用など）、みどりさん自身の治療支援、感情の整理支援、当事者コミュニティの紹介、正確な情報提供などを挙げている。また、「関わりの留意点」として、秘密の保持、感情の寄り添い、ネガティブ思考の防止、家族関係の支援、情報漏洩の防止、他の専門職の利用（連携）などを挙げている。

生成 AI と演習受講学生の回答を比較した結果、支援の目的、内容、原則、および連携体制において共通点が認められた一方、時間軸の捉え方に差異が確認された。

共通点として、両者とも HIV 患者である今井さん、みどりさんに対し、身体的ケアに留まらず、心理的サポート、社会的な支援など、包括的な支援を行うことを目的としていた。具体的な支援内容も、病状説明、不安への傾聴、情報提供、意思決定支援、感情処理、社会復帰支援など、多くが共通していた。また、患者本人の意思を尊重すること、及びプライバシーを保護するという倫理的原則を共有し、必要に応じた専門家との連携の重要性について一致していた。

一方、最も重要な相違点として、時間軸の捉え方に特徴が見られた。生成 AI の回答は、AIDS という疾患の特性から、支援の留意点として「長期的な視点での支援」の重要性を明確に強調する傾向にあった。これに対し、演習の受講学生の回答は、クライアントの現在の感情の揺らぎや差し迫ったニーズへの対応に焦点を当てた、一回の支援場面に限定した記述が多いという特徴が確認された。この差異は、AI が客観的な知識に基づき包括的な計画を提示するのにに対し、学生が対人援助の演習を通して、感情的な側面、内面に重点を置く実践的視点を養う過程を反映しているものと考えられる。

### 3. 英国と米国のソーシャルワーク実践への AI 活用例と課題

英国および米国は、ソーシャルワーク実践への AI 導入に関する議論と実践において先行する地域である。本節では、両国の論文や報告書に基づき、ソーシャルワークにおける AI 活用の現状と課題について概観する。

英国の NWAG の報告書によれば、ソーシャルワーカーは労働時間の65%にあたる週平均29時間を PC 作業や書類作成に費やしているとされる。こうした現状において、業務効率化と支援の質的向上を両立させる解決策として、AI 技術への期待は急速に高まっている。AI は管理業務の自動化からリスク予測に至るまで、専門職を支援する強力なツールとなり得るが、同時にプライバシー侵害や専門性の空洞化といった新たな倫理的課題も内包している。

AI 活用がもたらす主要な機会は、大きく二点に集約される。

第一に、職務の効率化と負担軽減である。ソーシャルワーカーは対人支援以外に、議事録作成、報告書やケアプランの策定など多岐にわたる管理業務に忙殺されている。AI 技術による音声認識を用いた会議の自動文字起こしや、要点に基づく文書の下書き作成支援は、これらの業務を大幅に効率化する。加えて、自然言語処理による情報検索は、膨大な記録からの情報抽出時間を劇的に短縮し (NWAG)、専門職が支援対象者との関係構築やアセスメントといった本来の対人支援業務に注力する環境を提供する。

第二に、予測分析と早期介入である。従来のソーシャルワークは問題顕在化後の事後対応が中心であったが、AI による過去の膨大なケースデータ分析は、将来のリスク予測を可能にする。具体的には、虐待、再入院、犯罪再発などのリスクが高い個人を統計的パターンに基づき特定することが可能である (CWDS)。これにより、支援のあり方を「事後対応型」から「予防的支援」へと転換させ、対象者のウェルビーイング向上のみならず、長期的には社会全体の福祉向上とコスト削減にも寄与する可能性がある。

しかし、社会的に不利な立場にある人々を対象とする本領域において、技術の導入には慎重な倫理的検討が不可欠である。公平性、プライバシー、専門性の維持といった核心的価値を損なうことなく、技術を活用するための責任ある AI 活用が求められている。

### 4. 考察：生成 AI とソーシャルワーク実践の融合可能性

本論において試みた生成 AI を活用した実践の結果、ソーシャルワーク領域における技術的な利点を確認された。一方で、先行する英米の知見が示す通り、利点のみならず潜在的なリスクや倫理的課題への深い理解と対策が不可欠である。以下、生成 AI の限界と可能性について考察する。

#### 4-1. ソーシャルワーク実践における生成 AI の限界

現段階での生成 AI の限界は、以下の三点に集約される (前田・梅野・関屋, 2024)。

第一に「専門性の不足」である。AI の出力は一般論としては有用であるものの、ソーシャルワーク固有の専門性を十分に反映できていない。

第二に「地域性の欠如」である。各地域の社会資源や制度に関する詳細情報が不足しており、地域に即した具体的な支援方針を提示することが困難である。

第三に「身体性の不在」である。AI は非言語的表現を読み取ることができず、面接場面における微細な表情や場の空気を捉えることもできない。共感的理解を基盤とする対人援助の本質は、現行の技

術では代替不可能である。

これら専門性・地域性・身体性の三要素は、現時点での主要な限界点である。

加えて、AIへの過度な依存は新たなリスクを生む。特に経験の浅い専門職において、AIの提案に頼りすぎることによって批判的思考や専門的判断力が低下する懸念がある。また、クライアントの個人機密情報、特に心理社会的な問題に関わるデータをAIが扱う際のセキュリティリスクやプライバシー侵害の危険性は無視できない。これらの課題は、技術導入に伴う倫理的・制度的なガイドラインの整備を急務とする理由である。

#### 4-2. ソーシャルワーク実践・教育分野における生成AIの可能性

上述の限界を踏まえつつも、適切なプロンプトにより、生成AIは一定の有用性を発揮することが確認された。

第一に、教育・研修への応用である。ソーシャルワーク教育や現任者研修において、事例演習の回答例提示やロールプレイの場面設定の作成など、AIは既に実用段階にあると考えられる。これにより、指導者は教育内容の質の向上に注力する時間的余裕を得ることができる。

第二に、実践現場での業務効率化である。アセスメントや援助方針の原案作成、連絡調整のためのメールの下書きなど、事務作業におけるAI活用は今後、普及する可能性が高い。特に音声入力と連携した文章生成は、専門職がクライアントとの直接的関わりに充てる時間を創出する上で有効である。

第三に、広報・アウトリーチ活動への活用である。SNS上での分断を煽るヘイトスピーチが溢れる今日において、生成AIは地域共生やソーシャルインクルージョンといった福祉的価値を発信する広報活動を支援できる。小規模な団体がAIを活用して効果的な情報発信を行うことは、人材等の確保にも寄与するだろう。

#### 4-3. 人間によるソーシャルワークの不可欠性と今後の展望

AIが人間の頭脳や身体性を完全に代替できない以上、ソーシャルワークは人間による実践であり続ける。しかし、援助者も万能ではなく、その認識は個人の経験や価値観に制約される。支援者と対象者の生活実態の乖離が大きい場合、適切な評価が困難となるリスクも存在する。援助者に求められるのは、家族関係、セクシュアリティ、価値観など多様な要素によって形成される生活の奥行きを総合的に理解しようとする姿勢である。この「身体性」を伴う理解が必要である限り、人間によるソーシャルワークの価値は揺るがない。

生成AIは、この人間による実践を補完し、人員不足の中でも理念に基づく活動を維持・発展させるためのツールとして位置づけられるべきである。同時に、AIが社会的不平等を再生産するリスクに対し、人間性によるコントロールを徹底する必要がある。今後の課題として、学生の段階からのAIリテラシー教育の導入やカリキュラムへの組み込みが挙げられる。また、就労支援分野におけるAI活用を通じた新たな就労モデルの創出など、実践的な開拓も期待される。さらに、社会からの信頼を維持するため、社会福祉領域におけるAIの安全で倫理的な利用に関する全国的なガイダンスや政策の確立が不可欠である。

## 参考文献

1. 前田瞬・梅野潤子・関屋光泰（2024）「医療ソーシャルワークにおける生成 AI 活用の可能性」『ITヘルスケア第17回年次学術大会抄録集』ITヘルスケア学会.
2. 大本和子・田中千枝子・大谷昭・笹岡具弓（1999）『医療ソーシャルワーク実践50例 典型的実践事例によるわかり易い医療福祉』川島書店
3. みずほ情報総研（2016）『生活困窮者自立支援制度の自立相談支援機関における帳票類の標準化等に関する調査研究報告書』平成27年度生活困窮者就労準備支援事業 厚生労働省.
4. GOV.UK. (2025) Artificial Intelligence(AI) in Case Recording – National Workload Action Group Supplementary Report.GOV.UK.
5. Frederic G. Reamer,(2023) Artificial Intelligence in Social Work: Emerging Ethical Issues: International Journal of Social Work Values and Ethics Vol. 20, No. 2
6. Child Welfare Development Services (2023) CWDS Research Summary: Use of AI Tools in Social Work and Child Welfare Services: San Diego State University.

<Report>

# Exploring the Potential of Generative AI in Social Work: Supporting People in Poverty

Mitsuhiro Sekiya<sup>\*1</sup>

Key Words:

Assessment; Case Study; In-service Training; Digital Transformation in Long-term Care

---

(Affiliation)

\* 1 Yamanashi Prefectural University